

授業改善書

| | |
|-----|-----------------|
| 科目名 | 心理学実験Ⅱ |
| 担当者 | 小島(古澤)・鈴木・市村・田中 |

授業の概要

前年度に「心理学実験Ⅰ」を履修し合格した学生を対象に、より応用的な内容の種目(態度測定、調査実習、知能検査、性格検査(作業検査法・投影法)、社会的促進)を実習し、実験レポートの提出を求めている。実験レポートの作成を通し、「科学的な事実の報告」である心理学論文の書き方を習得することが本授業の目標である。実験レポートの作成を繰り返すことで、将来的に自らの関心のあるテーマについて自力でデータ収集計画を立て、データの収集、分析、解釈、そして論文作成ができる力を養うことを目指している。

授業の問題点

学生の課題への取り組みに個人差が大きい。これは「実験」という内容であるがゆえに改善不能な問題点である。各実験において実施前に担当教員から概要を説明した後、2~6人で1つの班を作り、班ごとに一齐に実験を実施するが、実施の過程での処理速度や班員たちの協力具合は一樣ではない。そこで、早く終わってしまった班の学生たちには、実施後の説明までの時間、実験室内で静かに待機することを要請することになる。学生による自由記述のうち「効率が悪い気がする」という内容は、おそらくこうした待ち時間の問題を挙げているのだと推察するが、上述のようにすべてを一齐に実施することは困難であり、問題を改善する方策は考えつかない。また、内容がより応用的な実験種目になるため、分析方法などの理解の程度にも差が出てきやすいという問題がある。

授業改善の課題・方策

「実験」であるため出席することが大前提の授業であり、それは学生の回答結果にも示されている。問題は学生の自覚として「質問や発言をしましたか」の評定平均が低いことである。ただし、授業時間中には実験の実施等で目いっぱい質問等の時間がとれなくとも、授業時間外の時間を含めれば、心理学実験室勤務のTAへの質問など、自主的に質問を行う学生は一定数いるものと思っている。

学生の自由記述に「レポートに関しての説明、分析の方法に関しての説明がもっとほしい」との回答があったが、この点は授業の実施スタイルの改善というよりも、担当教員が学生に伝達している情報を、授業時間外に学生への質問対応を担当するTAに正確に伝達するかを改善点とすべきと思われる。

ただし、先行する「心理学実験Ⅰ」ですでに数種類の実験レポートの作成を行い、単位を取得している学生が履修者である「心理学実験Ⅱ」において、あまりにも基礎的なことを含めて説明を行うのは、自主的に調べて問題を解決する、心理学の卒業論文を執筆する訓練をする、という本授業の主旨とは矛盾し、学生のより自主的な学びの姿勢を強く求めたい。

その他

本授業は複数担当者によるオムニバス形式の授業である。

今学期は、古澤教授(調査実習)、鈴木客員教授(投影法)、田中非常勤講師(態度測定、知能検査、作業検査法)、市村非常勤講師(社会的促進)の4教員で実験指導を担当した。ただし、科目責任者・統括担当の古澤教授が学期途中で病気休職したため、授業改善書の執筆は、科目責任者・統括の担当代行として小島が行った。したがって本文書の文責は小島にある。